

子供の夢，親の野望——ジョルジュ・サンドの『ヴァランティーン』における «*mésalliance*» をめぐって

稲田 啓子

はじめに

ジョルジュ・サンドは、およそ半世紀にも渡る長い著作活動の中で、「身分や財産上の不釣り合いな結婚 (*mésalliance*)」の在り方を一貫して描き続けた。貴族の父親と庶民の母親との間に生まれた作者にとって、異身分結婚から派生する家族の諸問題は、身近なものであるがゆえに常に最大の関心事であったといえる。サンドがこの主題に取り組んだのは、処女作『アンディアナ』(*Indiana*)に続く第2作目、1832年の『ヴァランティーン』(*Valentine*)が始まりである。しかし19世紀前半のフランス社会において、異身分結婚はすでに、それほど珍しいことではなかった。革命のたびに激変する社会の風潮が、それまで道徳的に慎まれていた結婚という形の異階級の融合を受け入れるようになったからである。本格的にブルジョワ主体の政治体制となった1830年が、19世紀フランス社会の価値観の分岐点だろう。貴族の子女と財力を手にしたブルジョワとの結婚が広く行われるようになると、異身分結婚を特別視してきた社会の傾向が弱まっていく。その結果、七月王政に入るとすぐに、「*mésalliance*」という言葉は古めかしいものになるのだが、他方、「*mésalliance*」に対する否定的な感覚は、非常に根強く残ったままだった⁽¹⁾。慣習的な価値観が急激に変化することはない。異身分結婚を認めるものとそうでないもの、このような新旧の価値観の衝突は、恐らく政治体制の過渡期によく見られるものだ。まさにその時期に、ジョルジュ・サンドは異階級同士の恋愛と結婚を、好評を博した処女作に続く『ヴァランティーン』の主題としたのである。

七月革命のあと、いまだ揺れ動く時代の中で、社会の基本集団である家族の運命に多かれ少なかれ影響を及ぼすだろう結婚に対する価値観は、どのように変化したのか。ジョルジュ・サンドが初めて異身分結婚の問題を扱った『ヴァランティヌ』から、1830年代の家族の在り方と彼らの価値観を検討することによって当時の社会と家族の関わりを明らかにし、サンド小説における『ヴァランティヌ』の位置とその特徴に言及したい。

1. 親子の対立

とりわけ社会的上位に位置する家族にとって、結婚は家名と財産に係わる大きな問題である。それは『ヴァランティヌ』の中でも例外ではない。女主人公ヴァランティヌ・ド・レンボーの結婚にも、家名の維持発展を目指す家族の期待が集中している。ヴァランティヌの父親は既に他界しているため、伯爵家を取り仕切るのは、彼女の母親レンボー伯爵夫人と祖母の侯爵夫人である。女系で支えられたレンボー家は、ヴァランティヌを高貴な生まれのランサックと結婚させることによって、一族の安定を図ろうとする。そこへ百姓の息子ベネディクトが、ヴァランティヌの前に現れる。2人を引き合わせるのは、村主催の野外舞踏会だ。『フランス遍歴の仲間』(*Le Compagnon du Tour de France*) や『愛の妖精』(*La Petite Fadette*)、『笛師の群れ』(*Les Maîtres Sonneurs*)に見られるように、サンド小説はしばしば、村人たちが集う収穫祭や野外舞踏会を物語の動く重要な場面に設定している。これらの催しが、普段なら交じることのない異集団に属する者たちを接近させるのである。

ヴァランティヌは百姓の息子が申し出たダンスの誘いに応じようとするが、村人たちの前で娘と庶民が踊ることに恥を覚える伯爵夫人が、それを素早く阻む。娘とランサックの結婚を熱望する伯爵夫人はベネディクトの登場を警戒し、彼を「成り上がりの田舎男、教養だけ身に付けた田吾作^②」と呼んで蔑むが、一方、余裕を持ってそんな嫁をたしなめるのが祖母の侯爵夫人である。大革命を経験した侯爵夫人は、庶民を前に貴族的な虚栄心を振り翳すばかりの

伯爵夫人とは異なり、社会の流れを冷静に見据える人物だ。

伯爵夫人は、ヴァランティーンの親友でベネディクトの許婚者でもあるアテネの家にピアノがあることを知り、低い階層に属する者が自分たちと全く同じたしなみをもつことに驚く。そして彼女は自尊心の傷つく思いをするのだが、それは侯爵夫人にとって既知の事実であり、もはや動じる気配もない。侯爵夫人は、もともと商人の娘に過ぎなかった伯爵夫人シニョンに向かって、「今ではフランスのすべての人たちが教育を受けているのですよ。あなたは決して理解しながらないでしょうけれど、庶民も豊かになりました。彼らだって自分の子供たちに才能を与えることができるのです⁽³⁾。」と論ず。農民とはいえ裕福なアテネの両親は、娘に貴族の子女と変わらない礼儀作法を学ばせ、孤児となった甥のベネディクトを引き取ってパリに送り、立派な教養を身に付けさせてもいる。

実際、19世紀前半には、息子をパリの大学（特に法科）に送り込んで立身出世を願う裕福な地方の親が増加していた。パリ帰りの地方の青年は、サンド小説の主人公としてもよく見受けられる。しかしベネディクトをはじめ、『アントワヌ氏の罪』(*Le Pêché de Monsieur Antoine*)のエミールは、パリで教育を受けることによって逆に、親の意向から離れてしまう。ベネディクトは常に理論が先に立って仕事に身が入らないし、エミールも知識を生かして親の事業を継ぐことに意欲的ではない。彼らが受けた教育は、親の目論見どおり立派な職を得て大金を稼ぐということに直結しないのだ。そこでサンド小説の中ではしばしば、父と息子の間にかかる感情的な対立が描かれるわけだが、父親の居ないベネディクトは親子間の対立を免れる代わりに、周りの集団から受け入れられず孤立するという運命を背負わされている。教養があるだけで大した仕事もしない、どこか夢想的なベネディクトは、村人たちに奇妙な印象を与えるばかりで、村社会の中では完全に浮いた存在だ。イザベル・ナジンスキーは、このように成り上がりであるがゆえに中途半端な位置に居るベネディクトを、「個人の運命が予め固定されていた旧体制の社会と、教育や金銭によって、それまで重んじられてきた高貴さや特権が取って代わられた新しい社会との過

渡期に置かれた世代，すなわち，それらの狭間で見捨てられた世代の典型的な人物である⁽⁴⁾」と指摘する．七月王政の始まりから間もない頃，個人の能力だけで申し上れる時代はまだ訪れてはいなかった．ヴァランティースの祖母は伯爵夫人と異なり，ベネディクトの高い素養を評価しているが，それでも，自分たち貴族集団と彼との間には，やはり一線を画したままである．

『ヴァランティース』では，親に従順で，いかにも貴族の子女らしいヴァランティースの性質から，結婚問題を巡る親と娘の激しい対立は見られないが，その代わり，伯爵夫人と侯爵夫人，この嫁と姑の対立関係がたびたび取り上げられ，ヴァランティースとベネディクトの恋愛に微妙に絡んでいる．2人は，それぞれが生きた時代の模範的な価値観を備えた女性だ．侯爵夫人は革命当時の亡命貴族であり，一方，伯爵夫人はナポレオン1世の帝政時代に成り上がったブルジョワである．18世紀末から19世紀前半の動乱の時期，異なる境遇に在る上，対照的な価値観の下で育った彼女たちが真に分かり合うことはない．物語の後半，死の床に伏した侯爵夫人がヴァランティースに掛けた言葉が，それを物語っている．

「お母様にこう伝えてちょうだい，彼女の礼儀正しい態度には，わたしはとても感謝していたと．そして，ひどい振る舞いをしたことをわたしが詫びていたと．何はともあれ，生まれの卑しい女性にしては，お母様はわたしに対して大変行儀よく振舞ったと思いますよ．言ってしまうえば，わたしはシニョンの相続分など，それほどあてにはしていなかったのに⁽⁵⁾．」

嫁の生まれに対する軽蔑は，旧体制の貴族女性の脳裏から，最後まで消えないのである．階級を重んじる祖母の価値観は，ヴァランティースに残す遺言からも窺うことができるだろう．ヴァランティースとベネディクトの関係を見抜き，孫娘に「自分と異なる身分から愛人を作ってはいいけません⁽⁶⁾」と忠告する祖母は，ヴァランティースとランサックの結婚生活の破綻を予期するかのようだ．貴族女性が愛人を持つことは珍しいことではない．侯爵夫人が問題とするのは，

孫娘の相手が庶民に過ぎない点である。良識を欠いていると判断せざるを得ない孫娘の恋愛を気にかけてまま、侯爵夫人は死んでしまう。侯爵夫人を失い、ベネディクトとの不倫関係を知った夫にも見捨てられ、孤独に耐えられなくなったヴァランティーンは、救いを求めて全てを母に打ち明ける。けれども、娘の告白はレンボー伯爵夫人を激怒させ、彼女の手元には、母親からの侮蔑の手紙しか届かない。

ヴァランティーンと腹違いの姉ルイズや語り手によって、「ばかげた恋愛 (amour ridicule) ⁽⁷⁾」と言われるヴァランティーンとベネディクトの恋愛は、結局、2人の身の破滅と家族の不和を生み出すのみだ。1840年以降のサンド小説では、異階級に属する恋人たちの恋愛も物語の最後には認められ、彼らが無事に結婚を果たす場合が多い。ブルジョワ隆盛の時代の中で、40年代の社会が以前にも増して、異身分結婚の成立を許容していたという事実も考えられよう。しかし、30年代のフランスでは、まだそれにはほど遠い。『ヴァランティーン』における異階級同士の恋愛は、サンドの社会主義小説によく見られるような個人間における異階級の融和へ繋がらないばかりか、家族が抱く異集団に属する者への負の感情を助長させ、親子関係の断絶までも引き起こすのである。

2. 夫の役割

『アンディアナ』同様『ヴァランティーン』においても、ジョルジュ・サンドは愛のない結婚をしたために不幸になる夫婦の姿を描いている。ヴァランティーンは母親の薦めるランサックと予定通り結婚することを選択し、一方アテネは、ヴァランティーンとベネディクトの関係を知り、傷心のまま、ピエール・ブリュティとの結婚を決意する。ランサックとブリュティは、それぞれの女性にとって、いわばベネディクトの身代わりであるという点で同じだが、夫としては対照的な性質だ。前者は妻に対して全く無関心であり、後者は異常なまでの執着を持っている。

ランサックは、その家名こそ輝かしいものの、多額の借金を抱える男だ。そ

れゆえ、ヴァランティーンの相続する財産に縋ろうという彼の狙いは、物語の冒頭から仄めかされる。結婚後、妻とベネディクトの関係に気づいた際も、ランサックの反応はいたって冷静だ。彼は妻の軽率さに腹を立てながらも、相手の男が取るに足らない庶民であったことに胸を撫で下ろす。ベネディクトの属する村社会と自分を取り巻く貴族の上流社会とが接点を持つことなど、普通なまいと考えたからだ。「ランサックが望むのは、妻が慎重に振る舞うこと、そして奔放な行いによって、夫を、寝取られ男につきまとう間抜けで不当な物笑いの種にしないようにすること、それだけだ⁽⁹⁾」と語り手は結ぶ。ランサックの視線は常に、世間へと向けられている。社交界における自分の醜聞こそ、外交官ランサックが恐れるものであり、彼にとっては家庭の中に残した妻の精神状態など、問題ではないのだ。

逆に、アテネの夫ブリュティの妻に対する愛情はすさまじい。妻の元婚約者へ向けられたブリュティの激しい嫉妬心によって、ヴァランティーンとベネディクトの結婚の夢は結果的に潰えることになるのだが、当初彼は、妻に対して余裕のある夫を演じていた。自殺を図って死に損なったベネディクトの看病に妻アテネが勤しむことも、ブリュティは黙認する。しかし、ベネディクトの病状が回復したことを知った途端、彼は夫としての権利を強く主張し、妻にベネディクトの家への出入りを禁じるのである。このようなブリュティの姿勢は、妻を熱烈に想う証となって世間に好意的な印象を与えると同時に、強い夫の模範としても村の男たちの間で高い評価を受けるが、一方で、作者は村社会と上流社会において、受け止め方に感覚的な相違がある点を挙げている。「これは社会のさまざまな階級における偏見の違いに起因する。貴族の男性やブルジョワであれば、やはり妻が別の男を愛しているとなると、自分の評判が落ちてしまうと感じるものだ⁽⁹⁾」。けれども、ブリュティのような夫は村社会においても例外ではないだろうか。実際、ジョルジュ・サンドは『捨て子フランソワ』(*François le Champi*)の中で、フランソワと妻との関係を勘繰り、村人たちの間で寝取られ男と揶揄されることを極度に恐れる夫キャデ・ブランシェを描いている⁽¹⁰⁾。

いずれにせよ，世間をさして顧みず，アテネに執着する夫ブリュティは，先に述べたランサックと対照的な像を成す。しかしこれらの夫が迎える結末は同じだ。ランサックは，妻の弱みを盾に手腕を振り，ヴァランティースの所有財産を掠め取ることに成功するが，やがては決闘によって死んでしまい，ブリュティも，殺人事件を起こした後で自責の念にかられ，自殺するのである。このように，夫は相次いで小説の中から葬られていくのだが，最終的に姿を消す登場人物の中には，ヴァランティースとベネディクトも加えられる。嫉妬にかられたブリュティは，ベネディクトと密会しているヴァランティースを妻のアテネと見間違え，我を忘れて，ベネディクトを熊手で突き殺してしまう。自分の夫からは財産を奪われ，さらにはアテネの夫によってベネディクトさえも喪ったヴァランティースには，もはや頼るものなど何もなく，彼女もまた，すぐに命を落とすことになる。

ヴァランティースの死は，事実上，レンボー伯爵家の消滅を意味する。そもそも女系で成り立っていたレンボー家にとって，夫ランサックは，父親の代わりに一族を支える柱となるべき存在だった。けれども彼は，レンボー家の財産を自分の借金に充てることによって，家族を破産へと追い込む。そしてブリュティが，最後の打撃をヴァランティースに与えるのだ。ブリュティによるベネディクト殺害事件は，村中を騒がせ，アテネの実家を揺るがすことにもなる。ランサックとブリュティ，2人の夫は，家長に求められた家の安寧をもたらす役割を担うこともできず，むしろ，家族を崩壊へと導く因子となっている。

3. 社会と家族

ヴァランティースとベネディクトの異身分結婚は成立しないが，代わりに，一人残されたアテネには幸福な結末が用意される。彼女は今度こそ，互いの愛情に支えられた結婚を果たすのだ。アテネの再婚相手は，レンボー伯爵家を追放されたヴァランティースの姉の息子ヴァランタンである。夫ブリュティの死後，アテネの実家レリー家は騒動に包まれた。けれどもそれは，アテネの家の

消滅を促す決定打にはならない。一人娘のアテネは、のちにレンボー伯爵家の館と土地を買い取り、立派にレリー家を引き継いでいる。一方、ヴァランティエヌの実家レンボー伯爵家は、家族の巻き起こす不祥事に耐え切れず崩壊し、一族は皆、散開してしまう。

2つの家族の明暗を分けたものは一体何か。要因のひとつに、父親という存在の有無が挙げられよう。元々百姓の身でありながら、少しずつ財を蓄えていたレリー家には、家族を守り支える模範的な父親が居る。一人娘にはピアノを与えて優雅な生活を保障し、娘の結婚相手となるだろう甥には、資金を出して教養をつけさせる。そして思惑が外れて娘とブリュティが結婚しても、その後揉め事の起こるたびに媚をたしなめ、家庭を治めるような、そんな父親である。それに引き換え、レンボー家を支配する伯爵夫人は、娘の夫の横暴を抑え、家の消滅を食い止める力を備えていない。伯爵夫人は、たびたびパリに行っては家を留守にし、ヴァランティエヌが自分の思い通りに動かなければ、怒り狂った挙句に娘を見放す。ヴァランティエヌの周りで不穏な出来事が起こるのは、明らかにレンボー伯爵夫人が不在のときだ。しかし家庭に居ない主は娘の変化に気付くこともなく、事態は伯爵家の瓦解へと少しずつ進んでいく。

もうひとつの要因を挙げるとすれば、それはやはり財産問題だろう。ヴァランティエヌは夫から全てを奪われたが、アテネには両親によって遺される20万フランの財産が有る。親から受け継ぐ確かな経済力、これが、貴族階級やブルジョワジーに属する女性の運命を左右するのだ。『アンジボーの粉挽き』(*Le Meunier d'Angibault*) や『アントワヌ氏の罪』など、1840年代のサンド小説では、恋人たちに突如もたらされる金銭が異身分結婚の成立に一役買っている⁽¹¹⁾。『ヴァランティエヌ』におけるアテネの結婚にも、やはり親の財産という現実的な問題が関与していることは否定できない。彼女はいわば、父権の恩恵を受け、子供時代から憧れていた豪奢な生活を手に入れる。貴族の娘ヴァランティエヌが富も家名も失って物語から姿を消す代わりに、ブルジョワのアテネが、ヴァランティエヌの財産を買い戻し、彼女の住んでいた館に身を落ち着けるのだ。まさにこれは、大革命以降、本格化した位階秩序の逆転である。

ヴァランティーンが消え、アテネが伸び上がる構図は、1830年代当時の風潮を少なからず反映しているだろう。レリー家に見られるような成り上がりたちが、貴族に代わって社会を先導していく時代だ。貴族の家名に付随する高貴さを、異身分結婚を通して貪欲に手に入れようとするブルジョワも少なくないが、それでも、社会全体の価値基準は、目に見えない品位よりも金銭のほうに置かれるようになる。物語の最後に起こるヴァランティーンとアテネの立場の逆転は、貴族とブルジョワ間の経済的、社会的権力の推移を示すと同時に、時代の傾向と共に変わる家族の在り方とその問題までも露呈する。すでに確認したとおり、ヴァランティーンとアテネの辿る運命は、父親を中心とした家族の基盤の有無に係っている。動乱を繰り返し、目まぐるしく変わる19世紀前半のフランス社会の中で、ジョルジュ・サンドは、ヴァランティーンとアテネの幸福を描くことによって、常に変わらない家族の絆の必要性を問うているのかもしれない。

おわりに

サンド小説において登場人物が語る結婚観は、時代の流れと呼応する。1845年の『アンジボーの粉挽き』や『アントワヌ氏の罪』では、社会的な影響力も富もない貴族の子女は、逆にブルジョワたちに蔑まれ、彼らの側から結婚相手として拒否されるまでになる。貴族側の偏見とブルジョワのそれが衝突し、異身分結婚の成立はしばしば危ぶまれるだろう。しかし、『ヴァランティーン』とは異なり、40年代のジョルジュ・サンドの社会主義小説では、最終的に、結婚による異階級の融和が果たされる。階級や経済、慣習や宗教の違いによって生まれる家族や世間の妨害は、もはや異身分結婚を防ぎきれないのだ。革命が起こるたびに社会の風潮は変わり、人々の認識も変化して価値観は多様化する。生まれを重んじるか、家の財政状態を考慮するか、家族が子供の結婚相手を評価する基準は、そこだけに留まらなくなる。時代に応じて、社会が求める人物像、つまり家族が希望する理想的な結婚相手は、何かしら変わるものだ。

けれども、親が子供の結婚相手を選ぶ際、社会の標準的な価値基準を逸脱することはまずないだろう。たとえば『ヴァランティエヌ』の中でレンボー伯爵夫人が娘に宛がったランサックは、名門の出である上、社会的地位も高い。母親は家族の名誉のため、娘の結婚相手にランサックを選んだが、その期待に反し、婿の選択は完全な失敗に終わる。社会の、あるいは家族の価値観が、常に正しいわけではない。ヴァランティエヌの不幸は、子供の結婚が親の利益追求のみに利用された結果、生じた。作者はそこに、親が陥りやすい過ちを見るのである。

ともあれ、大革命以来、上流階級における結婚観も徐々に変わっていったようだ。「革命が家族の感覚を変えた。家族はブルジョワ的な構成単位となり、多くの女性たちが、自分で選ばなかった男性の伴侶となることを受け入れることができなくなったのである⁽¹²⁾」。親の勧める結婚相手に無条件に従う従順さを、女性たちは拒否し始めたのかもしれない。言い換えれば、旧体制の終焉に起因する比較的自由で個人主義的な気風が、結婚に対する女性の理想と願望を受け入れるようになったのだろう。生まれの良い女性たちも自分たちの意思で、結婚相手を求めようとする傾向が出てきたのである。

その意味では、サンド小説における異身分結婚は、19世紀前半のフランス社会に見られる現実の一部を反映しているといえよう。時代が許容し、増加させた異身分結婚の成立過程で、なかなか拭い去ることのできない個人的な感情の対立こそ、ジョルジュ・サンドが小説の中で捉え、描こうとしたものだった。殊に、異集団に対する偏見はしばしば誤解を生み出し、家族間に争いを引き起こすことによって、子供の望む結婚を危うくするものだ。ジョルジュ・サンドが『ヴァランティエヌ』から取り組み、晩年まで扱いつづけた異身分結婚という主題は、様々な価値観が交錯する現代にも通じる普遍的な問題である。

注

(1) Nicole Mozet, « Les mariages paysans dans l'œuvre de George Sand : mésalliance, désir et

- vertu », *George Sand, écritures et représentations*, Textes réunis par Éric Bordas, Eurédit, 2004, p. 84.
- (2) George Sand, *Valentine*, Plan de la Tour (Var), Editions d'aujourd'hui, Collection « Les Introuvables », 1976, p. 38.
- (3) *ibid.*, p. 91.
- (4) Isabelle Hoog Naginski, *George Sand, L'écriture ou la vie*, Honoré Champion, 1999, p. 119.
- (5) *Valentine*, op.cit., p. 321.
- (6) *ibid.*, pp. 320-321.
- (7) *ibid.*, p. 153, p. 164.
- (8) *ibid.*, p. 275.
- (9) *ibid.*, p. 244.
- (10) George Sand, *François le Champi*, Garnier Frères, 1981, p. 286.
- (11) サンド小説で描かれる財産の意味とその役割について，筆者は「1840年代前半のサンド小説における結婚の問題——財産と階級的偏見をめぐって」（人文論究第56巻第2号，2006年）の中で検討している．ここでは財産が，演劇用語で云うところのデウス・エクス・マキーナ（*deus ex machina*）の役割を果たしていることが確認される．
- (12) Henri Rossi, *Mémoires aristocratiques féminins 1789-1848*, Honoré Champion, 1998, pp. 71-72.

(大学院文学研究科研究員)